異邦人への福音

２０１３/4/4
西九州伝道所
佐々木正明

神戸の大震災の後、被災者が作った歌が唄い継がれて、多くの人たちの励ましになってきました。その歌が、こんどは東日本大震災の被災者たちの前で唄われて、大きな勇気を与えることになりました。生きる力、思いやる力、新しい希望を生み出す力となっています。歌を携えて訪ねてきた、神戸の小学生たちと一緒に唄う、年配の東日本大震災の避難者たちの目には、感謝と感動と喜びの涙が溢れていました。善意がどれだけ人の心を動かし、勇気と励ましを与えるものなのか、改めて思い知らされました。

それほど素晴らしい人の善意、思いやり、同情なのですが、私たち福音的立場に立つクリスチャンからは、どうしても素直に感動できないところ、同調できない部分が残ります。それは彼らがどれほど素晴らしいことをし、感動的な生き方をしたとしても、しょせんは、キリストの救いに与らない限り、永遠の滅びに陥る罪人の行いに過ぎないという神学が、心の底に定着しているからです。世の罪人の行いはどんなに素晴らしく見えたとしても、完全に聖なるお方からすると「汚れた布切れ」で、汚らわしく忌むべきものなのだという、福音派の神学理解が頭を占領しているからです。

「彼らは罪人なのです。どれほど素敵で立派な人たちであっても、神のみ前には罪人であり、悪魔の支配に陥って神に敵対して歩いていて、やがて永遠の滅びに陥るのです。だから、彼らも福音を聞いて救われなければなりません。救われて新しく生まれ、キリストに連なるものにならなければ、神のみ前に何一つ良いことはできないのです」と、教えられてきました。

そのような伝統的教えが間違っているというのではありません。ただ、なんとなく不信感が湧き起こるのです。果たして、聖書はそのように教えているのだろうか。間違ってはいないけれど、何かがおかしいのです。キリスト教の文化の中に生まれ育った福音派のクリスチャンたちには、わからない感覚かもしれませんが、異邦人として聖書を読み、異邦人として救われた筆者には、腑に落ちないのです。

伝統的西欧キリスト教諸国で築き上げられた神学は、たとえ間違ってはいないとしても

何かが足りなと感じるのです。それは、異邦人の立場、異邦人的な見方、異邦人的な考え方に配慮されていない、「キリスト教徒」という選民意識の神学であって、ユダヤ人でもなく伝統的キリスト教国の人間でもない、筆者のような人間の立場には考察も理解もまったく及んでいないのです。たとえ間違っていなくても、自分たちが理解した一面だけが強調されていると、全体としてみるならば、歪んだものとなってしまいます。

異邦人として生き、異邦人に福音を伝えようとしている私たちは、もっと、異邦人に関する聖書の教えを学び、理解しなければなりません。伝統的な西欧の神学を学び、それを受容して伝えるだけではいけないのです。パウロは異邦人への使徒として、異邦人のための神学というより、むしろ普遍的な神学というべきものの土台を敷きました。とはいえその神学は、まだ築き上げられてはいないのです。それを築いていくのが私たちの使命だと感じます。

Ⅰ.　アブラハムの救い

パウロがそれまでのユダヤ主義的信仰理解を打ち破り、信仰による救いという普遍的な神学を論じたとき、論拠として、躊躇なくアブラハムの例を持ち出しました。アブラハムは信仰によって救われたのです。

ところがこの有名なパウロの論旨には、重大なすり替えがあります。パウロは「キリストを信じる信仰」を論じていたのに、なんの予告も注釈も説明もなく、突然、「神を信じる信仰」に鞍替えをしているのです。パウロにとって、キリストは神の子であり神だったので、何ら矛盾はないのですが、異邦人である筆者には、キリストに対する信仰と神に対する信仰を、まったく同じに取り扱うにことには大きな理論の飛躍、すり替えとさえ言えるものがあると感じられます。異邦人は、果たしてそのような飛躍に耐えることが出来るでしょうか。

アブラハムは神を信じました。それによって義とされ救われたのです。神の言葉に信頼し、神の誠実さを受け入れたからです。ただし、彼はキリストを信じたのではありません。彼はキリストなるものを知ってさえいなかったのです。とは言え、アブラハムもキリストの功績の故に救われたのであり、キリストなしにはアブラハムの救いもなかったのです。ところが、アブラハムがキリストを知っていたかどうか、キリストを信じたかどうかという重大な要点、は問われていないのです。

私たちは、キリストを信じることなしには救われないと、教えられてきました。聖書もそのように語っているかのように思えます。ところが、パウロが異邦人の救いについて語

ったとき、すなわち、ユダヤ人にとどまらない普遍的な救いと、それに必要な信仰を語ったとき、彼は「ユダヤ人に与えられた律法」に留まって、その中で論じることができなかったのです。律法以前、ユダヤ民族以前の、アブラハムの例に論拠を求め、キリストに対する信仰ではなく、神に対する信仰について語らなければなりませんでした。

しかも、この時のアブラハムの信仰は、キリストに対する信仰ではなかったばかりでなく、罪の悔い改めや赦しの理解もなく、キリストの代償の死も復活による義の賦与も知らない、無知の信仰だったのです。ただ、自分と妻サラの肉体がすっかり衰えていたにもかかわらず、実子を与えるとおっしゃる神のお言葉を信じただけです。現在の私たちが通常持つ救いに至る信仰、キリストの贖いの御業を知る知識に基づく信仰とは、おおよそかけ離れた異質の信仰だったのです。

それだけではありません。彼の信仰は、一面では揺るぐことがなかったと言われるほどでありながら、厳しく見ると、神の約束の言葉に信頼しきれずに、色々と画策して妾によって実子を得ようとした程度の信仰です。大切なのは、それでも神は彼の信仰を「義とする」にふさわしいと、受け入れてくださったという事実です。

長いキリスト教の歴史と伝統を持った西欧諸国の神学は、このような点を見落とし、もっぱらキリストを信じる信仰について考察を深めてきました。自分たちが異邦人であるという事実さえ忘れて、あたかも自分たちは新約時代のイスラエル民族であるかのように、ユダヤ人に与えられた律法を、自分たちに与えられたものであるかのように理解してきました。

しかし、律法は原則的にユダヤ人に与えられたものであり、そこに教えられていることは、普遍性に欠けるのです。普遍性を持たせるためには、正しい適用をしなければなりません。罪という概念も、キリストという概念も、旧約聖書、すなわち律法によって培われたものです。その律法を持たない異邦人が、キリストを信じるように、罪を悔い改めるようにと言われても、その意味を正しく理解することはできないのです。

キリストの福音は救いへの唯一の道です。しかしそれが伝えられたとしても、正しく理解されないとしたら、福音とはなりません。伝統的プロテスタントの神学を背景に語る福音は、律法を持たない日本人にはなかなか理解できません。キリストを知らない日本人に、キリストの救いを理解させることは至難です。キリストによる救いは、律法という養育係によって道を整えられたものです。その養育係を持たない日本人に、私たちは養育係を持っていた人々に対するようには、福音を語ってはならないのです。

だからこそ、養育係を持っていなかったアブラハムの救い、彼が義とされた出来事が重要なのです。アブラハムが義とされた物語は、異邦人が義とされるための手本、あるいは模範なのです。パウロは異邦人への使徒ではありましたが、まだこの点を充分に理解していたようには思えません。少なくても、その点の議論を深めてはいないのです。彼は異邦人への使徒であり、普遍的福音の理解の基礎を固めましたが、そこで留まっているのです。大都市の、ユダヤ人会堂を拠点としていた彼の実際の宣教は、ほとんどがユダヤ人か、ユダヤ教徒化した異邦人を対象としたものであって、完全な異邦人宣教はどちらかというと計画外の、偶発的に起こったアテネでの説教の例など、ごくわずかでした。そのために、彼の異邦人への福音の神学は、基礎を据えただけで留まっているのです。

アテネに於いて異邦人に取り囲まれたパウロは、キリストについてではなく、神について話し始めました。当然パウロは、完全な異邦人を相手に福音を伝える場合、キリストから始めたのでは、話にならないことを知っていました。ただ、アテネは彼の伝道旅行のたんなる通過地点に過ぎず、ゆっくり腰を据えて語ることができなかったことと、彼の異邦人伝道が未熟だった点を考えあわせても、あまりにも性急にキリストに話を持って行き過ぎて、大多数の異邦人とは物別れに終わってしまったようです。パウロが、完全な異邦人を相手に伝道をする機会を、もっとたくさん持っていたならば、彼の異邦人への神学もいま少し発展を見せたことでしょう。

Ⅱ.　神への信仰かキリストへの信仰か

クリスチャンにとっては、神への信仰もキリストへの信仰も同じものと言えますが、多くの異邦人にとってはそうではありません。特に日本人の信仰観からすると、まったく異なるものです。大多数の日本人は、いわゆる八百万の神々を、理性に合わない愚かなものとして退けますが、自分の奥底にある厳かな信仰心、あるいは気高い信仰観を大切にしています。「神」という言葉では言い表すことができない、もっと気高く尊い、「目に見えず」「言葉でも表現できない」「なにものか」を、自分の存在の奥深くで密かに感じています。

日本人の多くは、自分が生きているのではなく、この「なにものか」によって生かされ、養われ、守られているのだと感じて、なにかにつけてそっと感謝をしています。ただ、感謝の対象が「目に見ず」「言葉でも表現できない」方であって、はっきりしないために、外面的な表現としては滅多に現れてこないのです。このような日本人の宗教観は、実は、聖書が教えるところと良く調和しているのです。

人間は神に似せて造られました。本能的に神を感じ、神を礼拝する動物として生かされ

ています。日本人もまた、人間として神を礼拝する本能を与えられているのです。「神」という日本語を用いると、八百万の神々に堕落してしまった神になるために、日本人は、心の奥底で感じている「目に見えず」「言葉でも表現できない」方を神と呼ぶのさえ恐れ、かえって、神なんていないと言ってしまうのです。心の奥深くに感じている崇高な方を大切にしているからこそ、神なんていないと言い切るのです。神宮や大社で参拝しても、本当に崇め尊んでいるのはそこに祀られている神々ではなく、その背後にいらっしゃると思われる、目にも見えず、手で触れることもできず、言葉で表現することもできず、ただ心で微かに感じることができるだけの、「なにものか」なのです。

私たちが万物の創造者を「神」と呼ぶのは、「とりあえずの翻訳」であり、「借り物の言葉」に過ぎません。旧約聖書の最初、創世記の一章一節に出てくる「神」という言葉も、実は、当時の周囲の人々が用いていた言葉で、万物の創造者を言い表すにはまったく足りない言葉した。それなのに、他に方法がなかったために「とりあえず借用」したに過ぎまません。それで神は、ご自分の真の姿を理解させるためにさまざまな方法で自己顕現を繰り返し、啓示の書もお与えになったのです。

日本人は、自分の心が本能的に感じている「なにものか」が、日本語で言う「神」ではないことを知っていますが、いったい誰なのかは知りません。気高く貴く畏れ多い方であると感じ、その「なにものか」について斟酌することも憚（はばか）ってきました。そのために、日本人は、曖昧な神意識、宗教観しか持たないままに、それでよしとして来たのです。

西欧的キリスト教から見ると、日本人の宗教観はまさに幼稚で、神学も理論も全くありません。しかしそれはむしろ、見えない神を見える偶像にしないという、日本人の高い宗教意識によることを理解しなければなりません。江戸時代の末期、キリスト教などの教義を取り入れた復古神道が出現し、明治政府によって取り入れられたこともありましたが、それは草の根の人々に受け入れられるには至りませんでした。見えない神の永遠の栄光の性質を、見える形で表現すると必ず歪（いびつ）になり、誤った理解と誤った信仰を産みだすために、聖書は偶像を作ることもそれを礼拝することも禁じているのです。人間の手による表現で、神を表すことはできません。同じように、人間の言葉や理屈によっては、神の永遠の姿を描き出すことはできないのです。それを一所懸命にやろうとしている、ギリシャ的思考に基づく西欧神学は、言葉による偶像制作にさえあたります。日本人は、自分が尊ぶ「見えない方」を説明することを、恐れ多いと感じているのです。

実のところ日本人は、聖書が天地の創造者、万物の創造者と言っている存在者、「われはありてあるもの」とおっしゃる方を、心の最も深い部分で本能として感じていながら、な

んとお呼びして良いかわからない存在として、「なにごとのおわしますかは知らねども」と、そっと崇めてきたのです。私たちは、この「ありてあるもの」とおっしゃる方を、とりあえず「神」と呼んでいますので、日本人が感じている「なにものか」をも、ここでは「日本人の神」と呼んでおきましょう。八百万の神々の神ではありません。すべての存在物の中に潜んでおられるお方です。それゆえに、唯一のお方です。日本人が崇めている目に見えない存在者、「日本人の神」は、聖書が教えている万物の創造者であり、万物を超越し、万物を貫き、万物の内に存在し、万物を内に収めておられるお方なのです。

　ただ、日本人が本能的に感じている尊い存在者の感覚は、あまりにも希薄である上に、言葉で説明できないものとされているために、曖昧模糊として多くの誤った感覚も紛れ込んでいます。それを理解した上でも、私たちは、神に似せて造られた本来の人間の姿を色濃く残している、日本人の神観を大切にして、これを接点として福音を伝達して行くのが賢い方法です。

　この、日本人が微（かす）かに感じている気高く尊い方は、アブラハムが感じていた気高く尊い方と、どれほど違うのでしょうか。幸いなことにアブラハムは神の自己顕示を受け、神をより良く理解することができました。それでも、いろいろと誤った感覚を持っていたことが、聖書の記述から伺えます。アブラハムの子孫であるイスラエル人は、神の顕現に加えて律法という啓示を受けながらも、なかなか正しい神理解を持つことはできませんでした。神の自己顕現も啓示も戴いていない私たち日本人は、なおさらのこと曖昧な中に残されています。しかし、神に似せて造られた姿を本能的に大切にし、多くの民族のようには偶像礼拝にも陥っていない、日本人の「神意識」は神の自己顕示を受ける前のアブラハムと比較しても、あまり遜色はないと思われます

　私たちは、この日本人が心の奥底で感じている方を、聖書によって明らかに説明してあげ、この方を信じること、つまり、信頼して生きることを教えてあげれば良いのです。すでに日本人は、この「何とお呼びしていいかわからない方」、「どのように説明していいのかわからない方」を、分からないままにもある程度信頼し、祀り、感謝をし、それを様々に表現しながら生活をしているのです。その日本人のうっすらとした神観を、聖書の教えによって少しばかり明確にし、信頼しやすくし、実際に信頼することを勧めてあげれば良いのです。

　ところが、キリストを信じるとなると、全く別のこととなってしまいます。日本人が心の奥底で感じている方がキリストであるというのでは、飛躍が大きすぎるのです。キリストというと、良くても、２０００年以上も昔に外国で生まれた偉大な人物であり、宗教家であり、キリスト教の創設者であり、尊敬できる人物ではあっても、日本人が心の奥底で

ずっと感じ続け、崇め続け、感謝し続けたお方とは感じられないのです。少なくても一般的日本人に、キリストこそ天地の創造者であり誠の神であるとう議論は、あまりにもかけ離れていて、頭で納得できないだけでなく、心も頷くことができないのです。キリストを多くの神々の一人として受け入れることはできるはずです。ところが、目に見えず、言葉でも表現できない、神ではない「神」、神より気高い「神」として受け入れることはできないのです。

悪くすると、キリストは実在したのか、宗教革命に失敗して処刑された人物ではないか、キリスト教は植民地主義者たちの世界侵略の精神的支柱ではなかったかなどという、ややこしい議論に発展してしまいます。ましてやキリストの救いを説明しようとすると、必然的に罪、悔い改め、代償の死、復活、三位一体などという、律法を与えられていない日本人には馴染みのない、難題に触れなければなりません。

私たちは単純に、私たちが本能的に感じている、大きく優しく豊かで情け深いお方に感謝し、その方を崇め、その方に信頼して生きればいいのです。それがアブラハムの物語を通して教えられる信仰です。天地の創造者であるという理解さえ、救いには必要のないものと言えるでしょう。西欧神学の大きな欠点は、この、人間は神ご自身に似せて造られた霊的な存在であり、神を感じ、神を礼拝する本能を持っているという事実を、軽々しく取り扱っているところです。確かに人間は、自分の理解力で神の救いの奥義を知ることはできません。しかし、神を感じることはできるのです。そして、パウロが言うように、神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、自然物によってはっきりと知られ、認められるのです。

日本人は２，３歳のときに母親と離ればなれになってしまい、１０年ほども他人の手によって育てられた子供のようです。本当の母親に会いたいということを、おおっぴらに口に出すこともできず、ただ密かに慕い続け、面影を追って生きていたのです。その子の前に、とつぜん母親が現れました。当然、ずっと慕い続け追い求めていた面影とは、随分異なった姿になっていました。直ちに、「お母さん」と言って駆け寄ることもできないかもしれません。でも、わずかに記憶に残っているおぼろげな面影が、その子を押し出すのです。ここで、母親を連れてきた人があれこれと母親について説明し、紹介するのは無用です。どうして別れて暮らすようになったかを話して聞かせるのも後でいいのです。「お母さんだよ」と言われた子供は、わずかに残った記憶と感覚からお母さんだと察して、胸に飛び込むのです。

ギリシャ哲学による、形而上学的な神理解を最初に持ってくる、プロテスタントの伝道方法は間違っています。人間は神に似せて造られ、神を感じる本能を与えられているので

すから、その本能を利用して伝道すべきです。ましてや日本人は、非常に情緒的で、感覚を大切にしているのです。神は頭で理解すべき知的対象ではなく、暖かい心の持ち主として、心で感じるべきお方なのです。見えない方に守られ育まれて、今まで生きてこられたのだという感覚を、さらに研ぎ澄まさせ、感謝の念を起こさせ、もっと信頼するべきことを感じさせれば良いのです。

Ⅲ.　神への信仰からキリストへの信仰へ

異邦人である日本人が、キリストを知らないまま心で感じていた「何とお呼びしていいのかわからない方」を、もう少し明らかに理解して、その方に信頼するだけで、果たして救いを受けることが出来るのでしょうか？

私たちはここで、「救われている」「救われていない」という区別を、あまり峻厳にすべきではありません。たしかに、キリストや使徒時代のクリスチャンたちは、救いの瞬間を大切にしていたように思われます。律法を知り、罪意識を持ち、救いを待ち望んでいた、ユダヤ的な背景を持つ人々に、伝道をしていたからです。強いキリスト教の背景の中で、罪意識を抱えていた人々を伝道の対象にしていた、メソジスト系やバプテスト系の大衆伝道者たちもそうでした。そのような環境で救いの体験を持った人達は、比較的明確に救いの時を語ることができます。

それでも、救いはあくまでも神の判断に属することであり、人間の判断には常に曖昧さや不確かさが付きまとうのです。アブラハムは神を信じて義とされたという場合も、一体いつの時点で義とされたのか、厳密には不明です。アブラハムはずっと神を信じ続けていたのであって、突然、なにもかも信じられるようになったのではありません。ただ神を信じたと言われる信仰を持ち、義とされるにふさわしい信仰を持ったことが、あの時点で明らかにされたのです。

神の側からご覧になると、信じたという瞬間があるのかもしれません。しかし人間側から見ると、大抵の場合、信仰は瞬間的できごとではなく、心の動きの過程なのです。ですから、昔から感じ、崇め、感謝し、祀ってきた「表現のしようがない方」が、聖書をもって自己を啓示しておられる天地の創造者であると理解し、その事実を受け入れ、改めてその方に信頼すると表明した時に、日本人は義とされるのかもしれません。あるいは、もう少し後で、キリストと神との関係がある程度理解されて、初めて義とされるのかもしれません。ただはっきりしていることは、神はそのような信仰のプロセスの最初から、その人の中に、救いに導き入れる働きを始めておられるということです。だから、そのプロセス

の最初の「とっかかり」を大切にしたいのです。

日本人に語りかけるとき、キリストからはじめると、理解してもらうのが非常に難しいのです。むしろ、日本人の心にある宗教心を利用し、日本人が自分の奥深くのところで感じてきた「お名前も存じ上げない方」こそ、聖書が教える天地の創造者であり、人間をご自分に似せてお造りになった方であるという事実から始めたほうが、理解してもらいやすく、受け入れてもらうことも容易だということです。

とはいえ、自分が心で感じて崇めてきた方が、天地の創造者だと知り、人間を造り、生かし、育んできてくださった方だという事実を受け入れ、感謝を捧げ、信頼をするだけで良いのではありません。たとえそれで義とされたとしても、伝道はそこで完結したのではなく、そこで大人の信仰になったのでもありません。伝道はさらに続き、信仰はさらに育てられなければなりません。

自分は罪人であり、神の救いが必要である、あるいは必要であったという事実も知らなければなりません。その罪の自覚は、律法に記されているユダヤ人向けの、罪の自覚の生じさせ方ではなく、異邦人向けの罪の自覚への導きがされなければなりません。日本人に対しては、罪という言葉を用いるよりも、不義理、あるいは不孝という言葉が適当かもしれません。つまり、自分を造り、生かし、あらゆる良いもので育み、すべての禍から守ってくださっていた方に対して、充分な感謝を捧げず、当然のお礼もしてこなかった不義理です。また親不孝という感覚があるならば、親のように面倒を見続けてくださった神に対する、神不幸という感覚も理解できるはずです。すべての良いもので私たちを養い育ててくださった方に、不義理を重ね、不孝を続けてきたのです。それこそが罪の本質です。

罪が理解されたならば、罪の赦しの必要性も理解されやすくなります。罪というものは、律法があって始めて罪と断定されます。パウロの言うところでは、律法のないところには罪もなかったのです。ただしそれは、ある行為が罪と断定されるためには、律法が必要であったという意味であって、まだ律法がない時から罪そのものは存在していたのです。神に似せて造られている人間は、本能的に善悪を感じ取ることができ、罪意識を持っていたのです。律法によっては、どんな行為が罪であるかを理解することができ、また、人間は罪人であるという認識が、より強く植えつけられるようになっただけです。

「菊と刀」という、日本文化について論じた有名な本によりますと、日本人は恥の意識を持ってはいるが、罪の意識は持っていないということです。なかなか鋭い分析ではありますが、西欧キリスト教的感覚からの独断です。日本人の倫理観は人間同士の付き合いの中から生まれたものであり、「絶対者」という感覚がないために罪という感覚の代わりに、恥の感覚になったというのは、日本人の倫理観を表面的に捉え過ぎている一方、西欧キリ

スト教文化の優越感が垣間見える結論と言わざるを得ません。「旅の恥はかきすて」という諺があるのは事実であり、日本人の恥の文化をよく表していると言われますが、「旅の恥をかきすてる」のは、何も日本に限った事ではありません。

確かに、キリスト教文化には絶対者の感覚がありますし、律法による罪意識もあります。とはいえ、それは神が意図されたほど強い意識でも正しい意識でもありません。それに比べ、日本人には「見えない方」「言葉でも形でも表現できない方」「私たちを生かし守っておられる方」に対する畏れが、社会生活の基盤として、あるいは人生の土台としてしっかりと据えられているのです。

日本人の中にある倫理観は、「旅の恥はかきすて」という側面もある一方、「誰が見ていなくても、必ず見ている方がおられる」という、強い意識に支えられていることにも注目しなければなりません。これは、絶対者の存在を前提としている「西欧キリスト教文化」の、倫理観に勝るとも劣らないものです。絶対者の存在を前提とした「恐れの文化」が、絶対者の存在を感じられなくなった人々に取って代わられると、災害の時の略奪や混乱の時の我先の行動が生まれるのです。多くのキリスト教諸国の、災害時の暴動や略奪の様子がニュースになる中、日本の大震災のときの整然とした行動は、世界中で話題になったとおりです。日本人は、神に似せて造られた性質を色濃く残しているのです。彼らの中には、「見えない大きな方に対する畏れ」という強い本能的感覚があり、その前に正しく生きようという良心が機能するのです。

日本人は多くのキリスト教諸国の人々よりも、鮮明な罪意識を持っています。ただ、罪という言葉と感覚が、日本人には理解されていない、あるいは受け入れられていないのです。罪というと、行動そのものを指すと理解されますが、日本人は、行動そのものより、その行動がどういう意図で行われ、誰に対して行われたかを問うのです。ですから、人間関係で用いられる「不義理」や「不孝」という言葉と、それにともなう感覚のほうがわかりやすいのです。本来、聖書が教える罪も、何が罪なのかと行動を探るよりも、誰にどのような意図で行われた行為かという点が問われるものです。罪意識とは、罪の定義を理解してそれを受け入れることではなく、神のみ心に反した生き方をしているという恐れの感覚なのです。

ですから、正しく聖書の教える罪を教えるならば、すなわち、神と人間の関係における不義理、不孝として教えると、日本人の方がよく理解できるのです。これほど優しく情け深い神のみ心を知らず、理解しようともせず、勝手に生きてきてしまった。その結果、人間を幸せにしようとしておられる神の前で、不幸な人生を送っただけでなく、他人も不幸に陥れ、神を悲しませることになってしまったと、感じるようになればいいのです。これ

を、キリストから話を始めて、「すべての人間は罪人です」と語りだしては、うまくいかないのです。日本人が心の奥深くで感じ続けてきた「目にも見えず、言葉でも表現できない方」に対する、感謝と配慮の不足という面から語るならば、理解されやすいのです。

ひとたび、自分たち日本人が心の深くで感じ、崇め、感謝をしてきた方が、聖書で言う天地万物の創造者であることに納得できると、日本人のたぐいまれな高い倫理観も、神に似せて造られた人間の本性を残すものとして大切にされる一方、罪の赦しの必要性と、罪の取り扱い方に思い巡らせることになります。その段になって、キリストの代償の死が意義深く伝えられ、救い主キリストへの信仰へと、話を持っていくことができるのです。

Ⅳ.　日本人の罪意識

さて筆者は冒頭で、日本人がどんなに善意と思いやりと同情をもって生きていても、罪人である彼らの行く末は、永遠の滅びであるというプロテスタント福音派の神学に、異邦人の一人として疑問符をつけました。キリストを信じなければ、永遠に火が燃え続ける地獄に落ちるのだ。だから福音を信じなければならない。だから福音を語らなければならないという、しばしば「地獄絵」などで表現されているあの神学です。さすがに伝統的な福音派の教会では、地獄絵を用いて恐怖感を起こさせる伝道はしないと思われますが、原理主義と言われる人たちの中では、しばしば用いられるやり方です。この世から天国に行くには、激しく燃える火の上に架けられた、十字架の形をした橋を渡っていかなければならないと、表紙に描かれた絵で教える伝道用トラクトなどが、私たちの教会の入り口近くに置かれていたりするとおりです。

確かに、読み方によっては、聖書はそのようにも読めます。ただそれは一面だけを強調した読み方であって、全体的に均整のとれた読み方ではありません。キリストを信じなければ、あるいは神を信じなければ、永遠の滅びに陥るのは確かです。しかし聖書によるならば、いま生きているこの世界が、すでに永遠の滅びの世界なのです。その厳粛な事実を見逃して、あたかも、死んだ後に永遠の死に入れられると考えるのは、聖書の世界観を理解していないことなのです。今のこの世が命である神から離れた社会であり、死の社会、滅びの世界なのです。ですからこの世に生を受けた者はみな、死の中に生まれてきたもので、死んでいるのです。だから命の源である神に、信仰によって繋がることによって、命を得なければならないのです。

ただ、この現世に生きている限りは、まだ「恵みの時、救いの日」の内にいるだけです。滅びの中にいながら、まだ救われる機会を与えられているのです。この、ある意味での猶

予期間を過ぎると、すなわちこの世の人生を終えると、恵みの機会は失われ、救いの可能性はなくなるのです。ですから人間は、この世で生きている間に、救いを手に入れなければならないわけです。聖書はまた、人間はすべて死に、死んだ後に裁きを受けなければならないと教えています。この世界でどのように生きたかが問われ、裁かれるのです。

ただ、この裁きの理解が、キリスト教国で練り上げられた神学は、我田引水というか、手前味噌すぎて、私たち異邦人には素直に受け入れることができないのです。多くの日本人クリスチャンたち、特に伝道者たちは、それを感じていながら、正統的神学から逸脱したと思われるのを恐れてか、声を上げるのをためらってさえいるのです。キリスト教がまだまだ西欧人の宗教で、日本人の宗教になりきっていない証拠です。

パウロは、律法のないものは律法なしに滅びると教えています。また律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行いをする場合は、自分自身が自分に対する律法だとも言いっています。さらに、律法を持たない彼らが律法の命じることを行うのは、律法の命じる行いが彼らの心に記されていることを示すとも語っています。（ローマ 2：12〜15） 残念ながら、ここで語られたパウロの異邦人の神学は、これ以上の展開も進展も見せていません。主にユダヤ人かユダヤ化した異邦人への宣教をしていたパウロには、これ以上深める必要のない主題だったのでしょう。ところが、完全な異邦人である日本人への宣教を試みている私たちには、この神学を深めることこそが必要なのです。

ここで大切なのは、まず、律法なしに罪を犯した者もすべて滅びるという、すでに取り扱った事実です。律法なしに罪を犯した者は、「律法がないのであるから救われる」とは言われていません。滅びるのです。次に、生まれつきのままで律法の命じる行いをする場合もあることです。これによって、律法を持たない異邦人である日本人も、律法の命じていることを行っている事実を、積極的に評価し説明できるのです。さらにその場合、律法が命じる行いは、日本人の心に記されていると言われているのです。すなわち日本人を始めとする異邦人の心には、文字によらない律法が記されているのです。

では、この文字によらない律法、異邦人の心に記されている律法とは、なんのことでしょう。それこそ、人間が神のみ姿に似せて造られているという、厳粛な基本的事実に繋がるものに違いありません。人間は罪によって堕落し、神の許から追放されて悪魔の支配下に移り、罪に縛られて生きるものになりました。神に似せて造られた本性も捻じ曲げられてしまいました。しかし神に似せて造られたその本性まで、完全に失ってしまったのではないのです。だからこそ、たとえ律法を知らない異邦人であったとしても、正しく生きることが求められ、自分の生き方に責任が問われるのです。

すべての人間が、神に似せて造られた本性を持っているために、本来的に善を求め、公平を追い、哀れみを持ち、平和を好むのです。聖であり善であり愛である神の本性に似せて造られた人間の本性こそ、心に記されている律法なのです。日本人はその人間の本性を特に良く保存している上に、偶像礼拝をせずに、見えない神の本性をそのまま崇め、感謝と礼拝を捧げている民族なのです。そのために、日本人は聖書を知らずキリストの教えも知りませんが、どのキリスト教国と比較されても決して引けを取らない、平和で穏やかな国を造り、人を尊び、和を大切にし、公正と正義を高く掲げて生きているのです。

このような国の人に、キリスト教国の宣教師は、罪を説くのを恥じるべきです。キリストは、自分の目に梁があるのに、他人の目の塵を取らせてくださいという愚かさについて語られました。西欧キリスト教諸国の人々は、聖書を持ち、キリストを知り、その教えも理解し、高い倫理観を持っているはずです。さらにその上、聖霊の力もいただいて高尚な人生を送っているはずです。でも、現実はそうではありません。聖書を読んだことがなく、キリストとその教えも知らず、聖霊の力も体験していない日本人が、彼らに引けを取らない生き方をしています。繰り返しますが、それは日本人が神に似せて造られた本性を大切にし、天地の創造者とは言わなくても、心の奥深くで感じる目に見えない尊い方を、目に見えないまま体でも触れられないまま、尊び畏（かしこ）んでいるからです。ぜひ、ローマ人への手紙の第 1 章 18 節から 32 節までを、注意深く読んでください。

日本人は西欧人のような罪意識を持っていません。お母さんの財布から 500 円玉を盗んだことは罪かもしれませんが、罪意識とはそんなことを意識することとは違います。絶対者の前に出るときの畏れこそ、本当の罪意識なのです。日本人は絶対者を知らないために、本当の罪意識を持つことができないというのは、一面、正しいと言えます。でも日本人は、西欧キリスト教諸国の人々が絶対者を感じるよりも、さらに強く、崇高な見えない方の存在を感じ、その存在の前には、自分は出ることさえかなわないのだという、畏れの意識を持っているのです。そのために、たとえば、日本で最高位の神を祭る伊勢神宮では、お願いの祈りはしないことになっています。崇高な目に見えない方の存在を象徴する場所に、出させていただいただけでもありがたく、ただただ感謝を捧げるだけです。その感謝を捧げることさえ、畏れ多いのです。

日本人の意識では、伊勢神宮に祀られている天照大御神でさえ「神」であって、日本人の心の奥深くに感じられている「見えない方」ではありません。それでも、畏れ多く、願い事などしてはならないのです。なぜ畏れ多いと感じるのでしょう。目に見えない、名をお呼びすることもできない、気高く尊く、大きく広い方の前に、自分はあまりにも小さいと感じるからであり、そのお方に生かして頂き、必要なものを与えて頂いているのに、充分には感謝を捧げていないし、正しく礼拝も捧げていないと感じるためです。これが日本

人の罪意識です。恵み深い方に対する不義理であり、不孝なのです。そういう不義理と不孝の中にしか生きてこられなかった自分を、穢れた存在と感じる意識です。

ただし、日本人のこのような感覚は非常に希薄で、日常の生活で気づくことはあまりありません。ところが真面目に自分の人生を考えるとき、あるいは深山に入って幽玄さに打たれたり、星空の神秘さに深く感銘を受けたりするようなとき、さらには豊かな農作物の収穫を祝うとき、海の幸に喜び歌うとき、かならず、そのかすかな感覚が頭をもたげてくるのです。ただ残念なことに、最近の日本人は自然に接する機会を失ってしまいました。それで、その自然の中に潜んでおられる方を感じ、その方に心を向けることも希になってしまいました。それでも、日本人が神社に詣でるときは、穢れを濯ぐための手水があり、滝に打たれて穢れを清めようとする意識があるのです。

とはいえ、伝道の一環として日本人に罪意識を持たせることは、それほど大切だとは思われません。心の深いところで静かに、希薄でありながら、確実に感じていた気高く、大きく、優しい方をしっかりと認めて、その方にはっきりと感謝を捧げ、崇め、祈り、賛美を捧げ、その方の力と善意に自分を任せることを学べば、第一歩として充分なのです。そのような生活を始めると、天地をお造りになった方が必ず、その人の中に働きかけてくださるからです。その働きかけを体験し、その体験を積み重ねていくと、確実な信仰となり、感謝の気持ちがいよいよ大きく膨らむのです。

感謝の心が募り、ありがたいという気持ちが大きくなると、それに正比例して、自分は充分な感謝をしてこなかった、それに見合うだけの奉仕もしてこなかったという、自責の念にかられます。それが本当の罪意識です。これほど恵み深く、公正に富み、愛に溢れている方を無視して、自分勝手に生きてきたことに対する後悔と悲しみが湧き上がります。そこに、神の救いの計画、キリストの降誕、十字架、贖い、甦り、赦し、義認、新しい命を語るならば、かなりの確率で理解してもらえるはずです。

Ｖ．　永遠に燃える火の池

キリストを信じることなく死んだ人は、だれでも、みな永遠に消えない火の池の中に投げ込まれるというのが、多くの福音派の人たちの考え方です。キリストが教えたいつまでも消えることのないゲヘナの火の譬えや、黙示録に記された永遠に苦しみを与える火と硫黄の池の記述から、そのような結論に至ったものですが、ここにも、ユダヤ人に対して語られた言葉をそのまま異邦人に適用する、大きな間違いがあります。

キリストが語った教えのほとんどは、直接的にはユダヤ人に対するもので、異邦人に適用するときは公正な判断が必要です。中には普遍性を持つ教えがある一方、厳密にユダヤ人に対して語られたもので、異邦人に適用することのできないものもあります。ただし、そのような教えであっても、特殊事情を理解し、その中から普遍性を見つけ出して、それを日本人に正しく適用することができます。

ゲヘナの火は、当時のユダヤ人に対して語られただけではなく、律法も預言者も持ち、キリストの行われた数々の印（しるし）のみ業を見ていながら、なおもキリストに敵対してやまない人々に対して、厳しい裁きの警告として語られたものであることを、理解しなければなりません。神の顕現も律法も与えられたことがなく、キリストの教えも印のみ業も見たことがなく、キリストに敵対して口汚く罵ったこともない、一般的な日本人に向けて語られたものではないのです。たとえ日本人がキリストを信じることなく死んだとしても、キリストの言葉を聞いても悔い改めることがなかった人々と、同じように苦しめられることは有り得ないのです。ただしたとえ日本人であっても、聖書をかなり理解し、キリストの教えと働きを理解した上で、キリストに敵対し、口汚く罵り続けていたのでは、ユダヤ人と同じような裁きを受けることになるでしょう。

黙示録の記述も、基本的にユダヤ文化を背景に書かれています。その上、この文書には黙示文学特有の解読の困難さがつきまといます。字義通り、文字通りに受け取ってはならないところが多いのです。多くの言葉が象徴的であり、背景を知っていなければその象徴を理解することさえできません。ですから、火と硫黄という言葉が字義通りかどうか、厳密には不明です。そのあとに続くいのちの書が実際の書物と考えるよりも、神の記憶という記録ではないかと思わせることを考えると、火と硫黄も象徴的な言葉と考えたほうが良いかもしれません。とにかく、この前後は象徴的言葉と字義通りの言葉が入り混じり、ここから断定的な神学を作り上げることは避けるべきです。

もしもこの黙示録の記述を文字通り、字義通りに受け取ると、キリストを信じていないすべての人は、異邦人を含めて、みな永遠の火の池に投げ込まれてしまうことになりますが、それは明らかに、聖書のより明快な教えに反することになります。パウロは、神の公平さを語り、ユダヤ人にも異邦人にも、それぞれの行いに応じて、ひとりひとりに報いが与えられることを述べています。その言い方は、その部分だけを切り離して読むと、まるでキリストを信じる信仰による救いとは関係なく、行いによって永遠の命を得ることが出来ると言っているようにさえ読めるほどです。（ローマ２：６～１１）

パウロはそのような言い方までして、神の公平さ、人種によって偏った取り扱いをしない神の義を語っています。それは、キリストを信じないものはみな、揃って永遠の火の中

に投げ込まれるというような、乱暴な取り扱いとはまったく異なるものです。たしかに黙示録の記述では、いのちの書に名前が記されていない者はすべて、永遠の火に投げ込まれることになっていますが、この一度だけの記述をもって、キリストを信じていない人はすべて、永遠の火に投げ込まれると断定するのは困難です。神のみ心に叶った者たちの名が、いのちの書に記されると言うのは正しいようですが、キリストを信じなければいのちの書に名を記されることはないと言い切るには、聖書に充分な根拠を見出すことができません。いのちの書に名が記されるということが、キリストを信じたものだけの特権だとは、言い切れないのです。いろいろな理由でキリストを信じることができなかった人でも、神のみ心に叶い、キリストの贖いのみ業のゆえに、いのちの書に名を記されることも、ないとは言い切れないのです。

またこの黙示録の記述とキリストの言葉を直接結びつけて、キリストを信じていない者の運命を断定するクリスチャンたちが多いのですが、それも避けたほうが賢明です。まったく異なった事情の中で語られ、また書かれたものを、主題が似ているから、言葉が類似しているからと、直接結びつけるのはよくありません。それぞれがどのような状況で、何を目的として書かれまた語られたかを、まず正しく判断してから、関連があれば関連させて考えるのです。黙示録の記述とキリストの言葉の共通性は、神の裁きがあることと、その裁きが非常に厳しいものであることです。また、その裁きがもたらす刑罰は、永遠という言葉や、火が消えることがないという言葉で表されている点です。

ともあれ、神の救いと裁きとは、神の采配、神の権威に属することで、私たちが事細かに知ることが出来るものではありません。それを断定的に、キリストを信じることができなかったすべての人が、永遠の火と硫黄の池に投げ込まれると言うのは、正しくありません。神の自己顕現を見、啓示の書を読み、キリストの教えを聞き、み業に触れた者たちが、なおもキリストに敵対し続けたとするならば、間違いなく、それが彼らの行く末でしょう。私たちに言えることは、神のみ心にかなった生き方をしなければならないということであり、この時代、神のみ心に叶う生き方とは、キリストに従う生き方であるということです。

そのキリストに従う生き方に入ることができるように、日本人にも、まず神について、ある程度の正しい理解を持ってもらい、その神に信頼できるように励まして上げなければなりません。最初にすべきことは、日本人が昔から心の奥深くで感じ、感謝し、崇めてきた、目に見えない方、ことばでも表現できない方、「神」とお呼びすることさえはばかられる方が、実は、天地を造り、人間を造り、人間にご自分に似た性質をお与えになった、聖書の神であることを知ってもらうことです。そうすれば、罪についても容易に理解してもらえ、悔い改めの必要性もわかってもらえます。そして何よりも、キリストの必要性に気づいてもらえるのです。

キリストを信じている人の善意も、キリストを信じていない人の善意も、神に似せて造られた人間の本性の現れであり、美しいものです。その本性が、律法を持っていない異邦人の心に記されている律法です。異邦人がこの律法に従って生きているならば、神はその善い生き方に報いて下さるのです。ただし、それで救いに入ることができるのではありません。救いは、心に記されている律法に従って生きたことによって受ける報いではなく、行いによらず、信仰によるものであり、報いではなく、神の賜物なのです。

ただ、しっかりと理解しておくべきは、キリストを信じないで死んだ人が、だれもかれも、十把ひとからげに、永遠に消えることがない火の中に投げ込まれるのではないことです。神は正義の神であり、ご自分の義に従ってすべての人をお裁きになるのです。

神の姿に似せて造られた人間の本性は、環境によって育てられ、環境の中で表現されるものです。従って同じ善意や正しさも、環境は文化によって異なった表現となり、ときには相反する表現になります。ある文化では、人を愛するということは、その人の間違いや欠点を黙って受け入れ、その人が気づくまで忍耐をして待ってあげるという表現になります。ほかの文化では、人の間違いや欠点を直ちに指摘し、それを直すように忠告し、直すことができるように手助けしてあげることになります。そのような違いを、人間が理解して判断し、裁くことは容易ではありません。その文化や環境によって異なった表現がされた人間の本性を、パウロは良心と表現したように考えられます。（ローマ２：１５）

心の中に記されている律法は良心となって表現されます。良心は、環境や教育文化というものの影響を受け、そのようなものの中で具体的に形を現した人間の本性であり、倫理です、それはおうおうにして、異なった文化に住み、異なった環境で育ち、異なった教育を受けた人間には、理解不能なものとなってしまいます。ですから、私たちは文化の異なる人たちの行動や考え方を、軽はずみに嘲笑ったり裁いたり、反対に感心してしまったりしてはいけないのです。ただ神は、そのようなものまで、正しく判断し、公正に裁いてくださるのですから、信頼することができるお方なのです。